巻頭のことば

『教育学研究室紀要』の第９号には、2010 年度～2011 年度 11 月までの院ゼミを中心とした教育学研究室の研究活動報告と卒業生も含めたゼミ参加者の論文､研究動向､調査報告、文献目録等が掲載されている。本号は、修士２年の森友里奈と研究室の事務全般をこなしてくれている村田純子が中心となって編集をすすめた。

教育学研究室は一昨年から、橋本が代表の日本学術振興会科学研究費研究（2009-2011 年度「子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究―戦後男女共学制の総括－」）に取り組んでいる。研究分担者や連携研究者にはこの研究室で共に学び、議論し合った、田代美江子（埼玉大）や艮香織（宇都宮大）などもおり、現在の院生、学生にいろいろな、情報やアドヴァイスをしてくれる貴重な存在となっている。

福岡、山口、京都、宮城、岩手、秋田県などの国内調査ばかりでなく、2009 年度のフィンランド調査, 2010 年度のイギリス調査、2011 年度の韓国調査等にも特別研究員の茂木輝順や当時院生であった森岡真梨も参加し、各人の問題関心に即した資料や情報の収集に努めてきた。本号には、その調査の一部を掲載したが、３年目を迎えるこの研究もまとめの作業に入りつつあり、関連学会誌への投稿等の課題が残っている。

この間、2010 年 3 月に小竹和美が修士課程を、2011 年 3 月に森岡真梨が博士課程を修了した。森岡の場合は、東日本大震災の発生により、卒業式も、博論発表会も中止となるという事態に遭遇したが、それぞれが論文の作成過程で、新たな研究課題や修得すべき研究技法について見出しており、今後の研究の進展や職場での活用が期待される。また、現職に就きながら博士課程に進学してきた丸井淑美や修士課程の長期履修生である榎村裕子も、仕事と研究・勉学の両立に苦戦しながらそれぞれの論文作成に取り組んでいる。

本号掲載の諸論考は、これらの院生の研究活動や科学研究費による研究などを反映したものであるが、研究活動の拡大と長期化により、調査の総括、論文化の時間を十分とれない事態も生まれている。今後、その点を考慮した研究活動を進め、研究室紀要にもそれを反映したいものと思う。

橋本 紀子